第12回日本聾史学会福岡大会
2009年12月20日
福岡市中央区: 福岡市市民福祉プラザ（ふくふくプラザ）
学習会「フィールドワーク入門: よりよい理解と信頼関係のために」
亀井伸孝
（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所［講演当時］）
（大阪国際大学人間科学部［2010年7月現在］）

[付記] 本論は、2009年12月20日に行われた講演をもとにして、2010年7月時点での新しい知見と情報を盛り込んで加筆を行ったものです。とくに写真などは、最新のフィールドワークの動向を示すものに差し替えたことをお断りしておきます。

■はじめに

第12回日本聾史学会福岡大会の盛大な開催、おめでとうございます。また、この大会に講師としてお招きくださり、まことにありがとうございます。

私は聴者の文化人類学者で、アフリカをおもな調査地としています。13年前から日本手話の勉強をし、手話通訳士資格を取得しました。また、12年前からアフリカ諸国の手話言語の調査を開始し、ろう者の民族誌を書くなど、ろう者と手話の文化人類学の研究を進めてきました。このため、日本手話のほか、西アフリカのいくつかの手話言語を学び、使用しています。妻がろう者ですので、家の中のことばは日本手話です。

この講演では、文化人類学者として、フィールドワークについての入門の話をします。前半では、フィールドワークとはどのような調査方法かという理論的な側面、たとえば、フィールドワークの歴史、長所、短所、課題などをお話しします。また、後半では、実践編として、実際に調査を行う上での具体的な方法や倫理について触れます。おもに文化人類学の立場での説明が中心になりますが、ろう者コミュニティの歴史研究にも応用することができるでしょう。

■フィールドワークとは

フィールドワークとは、「研究者が対象となる地域に自ら足を運び、そこに滞在しながら調査をすること」です。

研究にはさまざまな方法があり、実験室で行う研究、書物と向き合う研究、コンピュータで計算する研究など、分野や対象、目的によって方法は異なります。文化人類学は、人間社会の文化のさまざまな姿を実証的に明らかにするために、「フィールドワーク」という研究の方法を何よりも重視します。

今日、フィールドワークを用いる学問は、文化人類学だけではありません。歴史学、言語学、社会学などの人文・社会科学、生態学、動物行動学、古生物学、農学、地質鉱物学などの自然科学も、フィールドワークを行うことがあります。ただし、人間社会を対象としたフィールドワークを最初に始めたのは、文化人類学でした。

■フィールドワーク成立の背景

フィールドワークが成立した背景を、文化人類学の歴史とともにお話しします。

文化人類学は、19 世紀中頃のイギリスで誕生します。当時のイギリスは世界中に広大な植民地をもっており、植民地として支配していたアジアやアフリカ、太平洋の諸島などの人びとの状況を明らかにすることが求められていたという時代背景がありました。

ただし、初期の文化人類学者たちは、自分で現地を訪れてフィールドワークを行うことはしませんでした。アジアやアフリカなどの各地を訪れた植民地行政官や旅行者、キリスト教宣教師たちが書いた本を集め、書斎で勉強し、人類の文化についての理論をあれこれと考えるという方法をとっていました。このため、めずらしい文化の断片的知識を寄せ集め、全体を想像でつなぐといった、実証的でない研究もしばしば行われていました。

その典型例が、「進化主義人類学」と呼ばれている、当時の文化人類学の一派です。世界のさまざまな民族の文化を、「野蛮→未開→文明」というふうに序列化し、階段のように並べることで、人間社会の発展の図式を再現しようと考えたのです。そして、最も発展した最終段階は、自分たちヨーロッパの文明であると考え、それ以外のアジアやアフリカの文化は、そこにまだ到達していない過去の姿であると見なしました。

このような、実証的なデータに基づかない空想的な研究は、後に批判されるようになります。とくに、自分で現地に行って調査をしない研究の姿勢は、「安楽いす人類学」（書斎にこもって行う文化人類学）などと、揶揄されるようになります。このような背景のもとに、調査者が自分で現地に滞在するフィールドワークという新しい研究手法が誕生します。

■フィールドワークの祖マリノフスキー

フィールドワークの祖と言われているのは、ポーランド出身の人類学者、ブロニスロウ・マリノフスキー（1884-1942）です（写真 1）。20 世紀の始め、トロブリアンド諸島（現在のパプア・ニューギニア）で、世界で初めて本格的なフィールドワークをした人として知られています。その成果は『西太平洋の遠洋航海者』という民族誌として出版され、フィールドワークの基礎を築いた古典的作品として有名になりました（マリノフスキー, 1922）。

マリノフスキーの調査法の特徴として、長期滞在による実証的な研究をすること、現地の言語を自分も覚えて話すこと、現地の人びととの間に信頼関係（ラポール）を築くことなどがあります。調査者が現地社会と距離を取るのではなく、むしろ積極的に溶け込むことで、より深い理解をすることができるということを、実例をもって示したのです。

たとえば、調査で使う言語について、マリノフスキーは次のように述べています。トロブリアンド諸島はイギリスの植民地でしたので、一部では英語が導入されていました。しかし、現地の島民たちに英語で話を聞いても、会話が混乱してさっぱり理解できなかったのです。彼は現地のキリウィナ語を自分で覚えて話すことで、豊富な資料を得ることができたと記しています。

このことは、手話に置き換えてみると分かりやすいのではないでしょうか。ある聴者が「ろう者の文化を学びたい」と言ってやってきたら、どうでしょう。自分で手話を覚える姿勢をもっている聴者と、その努力をするつもりのない聴者と、どちらがより理解が進むかということを想像してみてください。

もっとも、マリノフスキーははじめから長期滞在調査を計画していたわけでなく、偶然のきっかけもあったと言われています。ちょうど彼がオーストラリアを訪れていた時、第

一次世界大戦が勃発してしまい、ヨーロッパに帰ることができなくなってしまいました。このためにやむをえず現地に長居したことが、フィールドワークという新しい学問の方法の発明につながったとも言われています。歴史は、何が幸いするか分かりません。

また、現地の人との信頼関係が重要だという点についても、実はきれいごとを言っているだけではないかとも指摘されています。没後に公開された日記には、現地の人たちについての悪口もいろいろ書いてあって、相当ストレスをためていた様子が浮かび上がります。

このような限界はいろいろとあったにせよ、マリノフスキーが築いたスタイル、つまり、長期滞在し、相手のことばを覚えて自分で話し、信頼関係の中でさまざまなことを学ぶべきだという教えは、以後のすべての文化人類学者のお手本となっています。それはやがて社会学などのほかの学問にも影響を与え、今日では多くの分野がそれを取り入れています。

■参与観察の特徴

フィールドワークの中でも、とくにマリノフスキーが行ったように、現地の社会に深く入り込む「参与観察」という方法は、有効な調査法としてよく用いられます。

参与観察とは、「対象となる集団に調査者自身が参加し、体験を通して文化の観察をすること」です。相手の言語を自分も覚えておしゃべりの輪に加わり、生活をともにしながら慣習を学び、あたかもその集まりの中のひとりとなったように溶け込むことで、自然な暮らしの営みを教えてもらいます。

フィールドワークの発想は「まず行って見てみる」ことですが、参与観察の発想は、見るだけでなく「まずいっしょに同じことをやってみる」ことだと言えます。食文化の調査なら現地の物を自分で食べます。仕事の調査をする時は弟子入りして技を学びますし、なかには秘密結社に入れてもらって儀礼をいっしょにする人もいます。

社会調査には、質問紙調査（アンケート）、電話調査、面接調査、インターネットでの調査など、さまざまな方法があります。これらの方法と比べた時、参与観察、つまり調査者の体験を通して得られた異文化についての知識は、質問紙や面接調査では決して得ることのできない、広く深いものとなります。それらをあまさず全体的に紹介する「民族誌」という書物を書くことが、文化人類学の最も重要な仕事です。

インターネットで情報を簡単にやりとりできるこの時代、何年もかけて現地調査する文化人類学の参与観察は「古くさい」と見られることもあります。しかし、どんなに時代が変わっても、体験を通して学ぶことの価値はいささかも変わることはないでしょう。

■フィールドワークの長所

フィールドワークという調査法がそなえている長所を整理してみます（表 1）。

【長所 1】自分の手で一次資料を入手できる

どんなに厳密な理論を考えても、どれほど文献を集めても、「現実の社会でどうなっているか」を確かめなければ、実証的な研究とは言えません。また、世界には多くの文献やインターネット情報があふれているように見えますが、その分野には偏りがあって、文字情報になっていないことは山ほどあります。フィールドワークの最大の長所は、自分が見たいもの、知りたいものに、直接出会えることです。

たとえば、私はアフリカ諸国の手話とろう者の調査をしていますが、まだ 1 冊も手話の

本が出ていない国、ろう者の実態が周りにまったく知られていない国がたくさんあります。どれほど推測してみても、そこでろう者たちがどんな手話を話しているかは、行って見てみなければ分かりません。しかし、行ってみれば必ず分かるのです。

私がろう者とともに歴史調査をする時、手話で語ってくれる昔話が何よりも貴重な資料となります。文字になっていない、ろう者たちの記憶の中にしか存在していない情報だからです。たとえば古い記念写真を見せて、昔のろう学校の様子や当事の仲間についての話を聞くという方法を、私は愛用しています（写真 2）。

【長所 2】長時間をかけて緻密な理解ができる

異文化を訪れて理解するのは大切ですが、文化を断片的に理解して分かったつもりになってしまったら、とんでもない誤解につながることがあります。

たとえば、日本を初めて訪れた外国人が、たまたまお正月に家庭でお雑煮をごちそうになったとしましょう。その体験に基づいて、「日本人はいつもお雑煮を食べている」と思い込み、国に帰って本などに書いてしまったらどうでしょうか。浅はかな理解が原因で、日本についてのたいへんな誤解が広まってしまうことになります。少なくとも 1 年間くらい日本の食文化を体験すれば、「お雑煮はお正月だけに食べるものだ」と正しく理解することができるでしょう。

文化は断片的なつまみ食いで理解できるものではなく、いろいろな要素を組み合わせて、全体として理解しなければなりません。このためには、現地での長期間の調査はとても役に立ちます。

【長所 3】当事者の視点を模擬体験できる

フィールドワークには、その場で思考することで、現地の当事者の視点を模擬体験できるという効果もあります。いちど現地に行ってしまえば、その場を簡単に抜け出して帰ることができませんので、その地域、集団の中に軸足を置いて、その現場からほかの世界を見ることができるようになります。

たとえば、東京に住んでいる人は、日本の中心は当然東京だと思っていて、「東京中心主義」の発想しかできない人が多いようです。しかし、東京に住んでいた人が、北海道や九州、沖縄に引っ越すと、その地方の視点で逆に東京を見つめ直すことができるようになるでしょう。自分の地域や文化が中心だと思い込んでいた偏った見方を、反省する機会にもなるでしょう。

■フィールドワークが生んだ思想

このような長所をもつフィールドワークの中で練り上げられた、文化人類学の重要な概念をいくつかご紹介します。まず、「自文化中心主義／文化相対主義」です。

私たちが異文化に出会い、自文化にない慣習や行動を見つけた時、つい自分の文化のまなざしで「汚い」「後れている」「非常識だ」「すばらしい」「進んでいる」「美しい」などと、ほめたりけなしたりしてしまうことがあります。しかし、このような理解は外部者による思い込みにすぎず、その文化を生きている本人たちにとっては何の関係もありません。このように、調査者が自分の文化を基準として異文化を断片的にとりあげ、よい／悪いなどの価値判断をしてしまうことを「自文化中心主義」と言います。

一方、そのような見方を戒め、あらゆる物事を相手の社会全体の中に位置づけて理解し

ようとする姿勢を「文化相対主義」と言います。とくに、ヨーロッパを中心とし、世界の文化を進んだもの／後れたものと序列化して見ていた時代への反省から、文化相対主義は、文化人類学の基本的な方法、倫理として確立しました。

もうひとつは、「エティック／エミック」です。文化人類学者が異文化を学ぶ時、二つの異なった視点のもち方があります。ひとつは、その集団の外部者の視点で文化を観察するというもので、これを「エティックな見方」と呼びます。もうひとつは、その集団の内部の人の視点で文化を観察しようとするもので、「エミックな見方」（イーミックということもあります）と言います。

エティックな見方は、多くの集団を広く調査し、必要な素材を集め、比較するのに便利な視点ですが、「その集団の人たち自身が文化をどう見ているのか」までは理解できません。一方、エミックな見方は、あるひとつの集団に深く入り込み、その文化の中を生きる人たちに近い立場で物事をとらえようとしますので、その集団の人たちにとっての文化の見方を知ることができます。科学の多くはエティックな見方での研究をすることが多いですが、長期の参与観察をする文化人類学者は、エミックな見方で理解することを得意としています。

異文化理解では、どちらか一方ではなく、両方の見方をバランスよくもつことが大切です。海外で長期調査をしていて、相手の集団のエミックな見方になじんでくると、自分がこれまで暮らしていた日本の社会の方が、かえって不思議な異文化に思えてくることがあります。このように、少し距離を置いて自文化を見つめなおすための「鏡」を手に入れることも、文化人類学の大切な役割のひとつです。

「文化相対主義」と「エミックな視点」、いずれも、自分が見ている世界がすべての人にとって同じだとは限らない、まったく別の見方をしている人が世の中にいるかもしれない、という発想に基づいています。このように、他者の世界観を尊重する姿勢をもつことが、文化人類学の特徴です。この姿勢は、相手の側にすっぽりと入り込んで学ぶ、フィールドワークという調査法を通してつちかわれてきたのです。

■フィールドワークの短所

一方、フィールドワークについては、不便さ（短所）も指摘されてきました（表 2）。

【短所 1】時間がかかりすぎる

まず、フィールドワークは時間がかかりすぎるという批判です。半年も 1 年もかけて理解するのは長過ぎる、というのです。確かに、地震や津波で被災した地域、戦争や飢餓で苦しむ人びとに対して、緊急援助をしなければならないという時、「1 年くらいかけてゆっくり理解を深めてから支援しよう」などと、悠長に言っている場合ではないでしょう。貧困や差別という慢性的な課題に取り組む上でも、のんびりと調査ばかりしているわけにはいきません。長期滞在するためには、時間だけでなくお金も必要です。正確な理解のためには長期間の調査が必要ですが、国際開発研究など、なるべく早めに結果を出して支援を進めたいと考える分野では、少し簡略化した短めのフィールドワークの方法が工夫されています。

【短所 2】調査者の主観や印象がまざりこむ

現地での人間関係と直接体験に基づく調査は、時として、主観的だ、調査者の印象が含

まれている、と指摘されることがあります。もちろん、フィールドワーカーは客観的な資料を集めるよう心がけますが、個人として現地でもった印象を100%ぬぐい去ることはできません。「それは、あなたの見方ではないですか？」とつっこまれることもしばしばです。「印象も含めて現地調査だ」と考える立場もありえるかもしれませんが、フィールドワークが文学ではなくあくまで科学の手法である以上、客観性にこだわることは重要です。たとえば、観察・体験したことをなるべく数えたり測ったりして、数量として記録するなど、できるだけ客観的に示す工夫も求められます。

【短所3】調査法を共有しにくい

フィールドワークは、複雑な現実の社会を相手にしますので、「こうすれば必ず明らかな結果が出る」という実験の手順のような決まった方法がありません。いわば、個人が現場での試行錯誤を通して、経験として身に付けた、職人芸的な方法であるとも言えます。予想外のできごとやもめごとにまきこまれることもあって、臨機応変、その場その場での判断でうまく観察し、聞き取りをすることが多いのです。

私が大学院生としてフィールドワークを始めた時も、「とにかく現場に行ってこい！」というような教育（とも言えないような教育）が行われていました。現場で自分の柔軟な判断で対処できるという長所をもちますが、反面、再現しにくい個人的な技法のかたまりであると言ってもよいでしょう。今後、フィールドワーク教育をいっそう振興し、広めていくためには、一部分をマニュアル化することも意味があるかもしれません。

■フィールドワークをめぐる同時代の課題

さらに、近年では「フィールドワーカーが調査協力者に対して特権的な位置にいてよいのか」という批判や反省がなされ、解決すべき課題がいくつもあるとされています。とくに、1980年代以降、このような議論が増え始めました（表3）。

【課題1】長期滞在の中で「調査被害」の問題が起きることがある

これは、「調査に来られる側」の気持ちになってみると、分かりやすいと思います。ある日、みなさんの家に、手話が話せない聴者たちが「ろう者のことについて教えてほしい」とどやどやとやってきたら、どう思いますか？　調査の目的とはいえ、ろう者が手話で快適に生活をしている場所に、音声で話す聴者たちがズカズカと入り込んできたら、不快な思いをすることもあるでしょう。そのようなことを防ぐために、みなさんだったらその人たちに、どんなマナーを求めるでしょうか。

【課題2】現地を去った後、勝手なイメージで論文を書いてしまう

調査する側の人たちが、調査対象となった人たちのことを勝手に書き散らしてしまうことについての批判もあります。エドワード・サイードは『オリエンタリズム』という本で、ヨーロッパ人がそれ以外の地域（とくに中東）のイメージを勝手に書き散らし、ヨーロッパのために都合よく利用してきた歴史を告発します（サイード, 1978）。

ある集団について、「文化を書く」権限をもっているのはだれでしょうか。当事者だけでしょうか、それとも外部の人も書いていいのでしょうか。どのように書いたら、よい紹介となるでしょうか。

【課題3】当事者が自分で発信すればよくて、代弁者は要らないという考え方もある

【課題2】とも関わりますが、当事者が自分たちで文化を書いて紹介しますということに

なれば、わざわざ外部の人が代理で調査して紹介する必要はないという考え方にもなります。文化人類学では、当事者自身が自文化を紹介する「ネイティブ（自文化）人類学」が主張されるようになりました。

ろう者コミュニティにおいても、「ろう文化について書くことができるのはだれか。ろう者か、聴者か？」という問題として考えてみることができるでしょう。当事者でない人は、黙って研究から手を引くのがいいのでしょうか。それとも、外部の立場の人だからこそできる貢献はあるでしょうか。このあたりの、適切な役割分担を考えることも必要な時代となっています。専門家だからといって、好き勝手にしてよいわけではないのです。

【課題 4】植民地支配やアパルトヘイト（人種隔離政策）を補強した過去がある

かつて、大日本帝国の領土拡張とともに、日本の人類学者たちが、旧満州や朝鮮半島、台湾、太平洋諸島などで調査活動を広げていった歴史があります（山地, 2006）。侵略に賛同したり、植民地政策に深く関わったりした人もいれば、単に「調査しやすくなってよかった」と喜んでいた便乗者、逆に、現地文化の保全を訴えて植民地政策を批判した人まで、研究者たちの立場はさまざまでしたが、フィールドワークが侵略・植民地支配と密接であった時代を忘れるわけにはいきません。

また、南アフリカでは、1990 年代までアパルトヘイト（人種隔離政策）が行われていました。それが導入された当初、イギリスの人類学者たちの研究成果が政治的に利用されたことがあります（峯, 1996）。「白人とは異なる、黒人たちの固有の文化を守ろう」という言いがかりで人種差別や隔離を合法化し、白人たちが富と権力を独占して、黒人たちを劣悪な環境へと追いやっていったのです。このように、フィールドワークの成果が、民衆への迫害と密接に関わりをもってしまう危険性も、私たちは知っておきたいものです。

【課題 5】固有の文化を擁護すると、「人権」などの普遍的概念を普及させる場面で、抵抗勢力となってしまうことがある

フィールドワークにより、相手の文化を尊重しながら学ぶのはけっこうですが、国際開発や人権啓発活動などの分野で、「文化」の話題を出すと、嫌がられることもあります。たとえば、宗教上の理由で、女性や障害をもつ人たち、ある社会階層に対する根強い差別や偏見があった場合、そのことも現地の伝統文化として尊重すべきだと思いますか。それとも、改善を提案していくのがいいのでしょうか。

先に述べたように、文化相対主義は、異文化理解を目指すフィールドワークが生み出した最良の財産と言えます。しかし、「相手の文化にいっさい口出ししてはいけない」と思い込むのも、また問題なのかもしれません。

以上のように、いろいろと短所もあり、同時代の課題も指摘されているフィールドワークですが、国際化が進む今日、自分たちと異なる文化をもつ他者と出会うことはいっそう増えていくでしょう。相互理解は欠かせませんし、昔のように、現地を訪れもしないで好き勝手なことを書き散らしていた時代に戻るのがよいとも思えません。

「実際に会って体験しながら学ぶ」ことの意味の大きさをかみしめながら、新しいフィールドワーク肯定論へと工夫を進めていきたいものです。とくに、調査が「一方的な収奪」になってしまわないよう、現地の人と調査者が、対等なパートナーどうしの出会いの中で、お互いを育み合えるようなフィールドワークができないかと考えています。

なお、私自身もよくやっていることですが、「どのような調査をするのがよいか」という

ことを考える時、「自分が調査される側になったらどう感じるだろうか」と想像してみると、よいトレーニングになります。もし外国人が調査に来たら？　もし手話の分からない聴者が自分の家にやってきたら？　そのような時、自分なら調査者に何を求めるだろうかと考えてみて、それを鏡として、自分たちが行う調査の姿勢を正す参考にするのです。

■調査協力者の探し方

さて、講演の後半では、フィールドワークの方法と倫理を中心に、具体的なコツをご紹介していきたいと思います。まず、調査協力者の探し方です。「調査に協力してくれる相手を、いったいどうやって探すんですか？」とよく聞かれます。

調査協力者を探す時は、まず現地事情にくわしい研究者や、親しくなった現地の人に、調査したい目的や事情を話し、アドバイスをもらうのが一番早いと思います。一度だれかときっかけができれば、後は、友人、知人、親族などへと、芋づる式に調査対象が広がっていくことが多いです。いわば、なりゆきまかせで人脈が増えていくということです。この方法は、雪玉を転がすとどんどん雪がくっついていくことにたとえて、「雪だるま方式」と呼ばれることもあります。

とりあえずはなりゆきまかせでよいでしょうが、調査の目的とかけ離れてしまったら困ることもありますので、時には、調査対象となる人たちを変えることがあってもよいでしょう。「一度お願いした以上、今さら断りにくい…」と人情に引きずられて、調査計画を犠牲にする必要はありません。ただ、後で「なぜ、君はおれたちのことを見捨てたのか」などと嫉妬や反発が起こらないように、断るにしても、人間関係に工夫をしたり、理由を適切に説明したりして、気持ちよく変更することができるとよいと思います。そのあたりはマニュアルのない、ほとんど社交術の世界です。

なお、人脈が広がり、調査の目的が次第にずれていった結果、時には予想もしていなかったすばらしい研究テーマに出会うこともあります。「当初の調査の目的とずれてしまうこと」は、事前に用意した仮説を検証するタイプの調査計画にとっては「困った事態」なのかもしれませんが、実は「フィールドワークの魅力」そのものでもあります。頭でっかちに最初の調査計画を守り抜くことばかり考えず、時には少々脱線することがあってもいいでしょう。それも現地調査の選択肢が増える創造的なことだと思って、楽しむ余裕をもちたいものです。

■相手の同意は不可欠

調査をする上で、相手の同意を得ること、さらには、快くいっしょに作業をしていこうと思える関係を作ることは、非常に大切です。もちろん、調査の目的をはっきりと説明しますが、それだけでなく、時には肖像権や著作権などの権利関係の確認をすることも求められます。日本ではまだ制度化が進んでいませんが、アメリカなどでは、社会調査を行う前に大学などの倫理委員会で計画の審査が行われ、相手の権利の侵害を引き起こさないかどうかなどをチェックされます。

私たちは、現状では、さほど制度的な制約を受けていません。たとえば、相手との間の会話などをデータとして使うことについては、お互いの信頼関係の中で「調査なのでいろいろ教えてよね」「うん、いいよ！」のように、日常的な関係の中で事実上の同意をもらっ

ていくことも多いのです。

ただ、現地で撮影した写真や映像を、日本に持ち帰って博物館展示するなど、明らかに肖像権が関わるような場合は、現地の言語で記された同意書を用意し、署名をもらうという手続きをとることもあります。当然、どこの人とも分からない怪しげな来訪者に対して署名する人はいませんから、このような形式的手続きをするためにも、一定の信頼関係ができていることが必要です。

■ラポールの大切さ

こうした調査倫理の問題を考える時、重要になるのが「ラポール」です。何度か指摘したように、文化人類学者がフィールドワークをする時に必要なのが、対象集団の人びとと仲よくなることです。何か月も、時には何年も生活を共にして学ぶのですから、仲よくならなければ調査を続けることができません。このように、調査の滞在を通して対象となる人たちとの間にできる信頼関係を「ラポール」と言います。ラポールができると、ふだん聞けない本音を教えてもらえたり、外部者が見てはいけない儀礼に参加することを許されたり、調査の幅と奥行きがぐっと広がります。

もっとも、文化人類学者は、調査のためにラポールを利用するだけともかぎりません。ラポールは調査の手段であるとともに、現場にいるひとりの人間として自然につちかわれる親しさの感情に根ざしていますので、滞在で得ることができる生き方の一部でもあります。その地に永住することを選んだり、対象集団の中の人と結婚したり、人生を変えてしまう人もいます。

そこまでしないとしても、文化人類学者がラポールに導かれ、何十年も同じ村に通い続けるということはよくあります。また、噴火や震災などの災害時に救援に駆け回ったり、恩返しに村に学校を建てたり、文化を紹介するための博物館をいっしょに作ったり、ラポールは「調査」の範囲をこえて、研究者がさまざまなアクションへとふみ出していくもとになることもあります。「観察して学ぶだけ」にとどまらないこともある、文化人類学者の姿のひとこまです。

■現地で成果還元しよう

ラポールをつちかう上でとても大事なこととして、調査地で成果の還元をすることをお勧めしたいと思います。調査の結果、どのようなことが分かったかを、できるかぎり協力してくれた方がたに開示するのです。

私は、アフリカ諸国でろう者たちとともに調査をしてきましたが、カメルーンで、ガーナで、ナイジェリアで、コートジボワールで、行く先ざきで講演会やセミナーを開き、私の研究の内容について紹介します（写真 3）。ろう者たちを相手に、現地の手話を使って成果の発表をすると、とてもよく理解してもらうことができます。間違いがあればその場で指摘してもらえますし、信頼関係も強めることができる、まさに一石二鳥の企画です。この意味でも、現地の言語を自ら進んで覚えて使うということは、やはり重要なことだと思います。

日本では、2003 年にこの聾史学会で初めて発表の機会をいただいて以来、さまざまな行事などの場で、日本手話で成果の発表をするように努めてきました。これも、日本のろう

者のみなさん向けの成果還元活動のひとつとして、重要なことだと考えています。

■謝礼については状況次第

フィールドワークのコツとして、時どき聞かれるのは、謝礼についてです。「金品を渡したほうがいいか」「いくらぐらいがよいか」などです。これについては、統一された基準や相場はありません。私も、その時、その場の状況に合わせて判断しています。

たとえば、相手に「調査助手」となってもらい、時間を決めて謝金（給料）を支払うこともあります。あるいは、個人に払うのでなく、協力してくれた団体や教会に対して、まとめて一定額の寄付をすることもあります。一方、あまりお金に縛られるとかえって調査しづらくなると思った時は、お茶１杯、食事１回などでお礼に代えることもあります。

海外調査に行く時、私は日本のお土産、たとえば扇子や手ぬぐい、キーホルダーなど、ちょっと珍しい小物をいくつかまとめ買いして持っていきます。「なぜ手招きをしている猫が日本では縁起がいいとされているのか」など、話題作りにも役立ちます。お互いの信頼関係があれば、必ずしも現金の謝礼にこだわる必要はないでしょう。

一般的には、お金や物を大量に現地にもたらすと、「あいつは金持ちだから、付き合っておくとおいしい思いができる」などとレッテルを貼られ、なめられてしまうことがあります。また、調査に関われない近隣の人たちの嫉妬を招き、調査の妨げとなってしまうこともあるでしょう。ですから、あまり大盤振る舞いをせず、質素に進めるのが賢明だと思います。もちろん、相手の言いなりになる必要もありません。同じ地域・集団に関わる研究者どうし、「時給、いくらぐらいにしている？」などと情報交換をして、現地で極端な「価格破壊」が起こらないように調整することもあります。

■アクションのいろいろ

謝礼のほかにも、現地でいろいろなお手伝いをする流れになることがあります（武田・亀井編, 2008）。たとえば、薬を分けてあげたり、通訳をしたり、ケンカの仲裁をしたり。また、病気になった友人を車で病院に連れて行ったり、勉強を教えたり、お金を貸したりする人もいます。さらに大きな事業として、お世話になった村に学校を建てたり、NGO を作って大がかりな国際支援事業を始めたりする人もいます。そのほか、よくあることとして、「日本のことを聞かせてほしい」「日本語がおもしろそうだから教えてくれ」などと頼まれて、ちょっと教えてみることもあります。これは、こちらがいつも現地のことを教わってばかりいるので、そのお返しということになるでしょう。

私が最近力を入れているお手伝いは、「アフリカ諸国の聴者たちに対する啓発活動」です。ろう者たちの手話が言語だと知らない聴者たちが多いと、手話の研究も地位向上もはかれません。たとえば、大学の言語学研究所にろう者とともに出かけていき、研究大会で発表して、手話を言語として尊重するよう求めるなど、研究者としての専門知識を生かした活動をしています（写真 4）。

このようなさまざまなお手伝いは、相手と仲良くなることができ、調査のための協力関係が深まりそうであれば、やったほうがよいでしょう。自分のむりのない範囲で現地のいろいろな活動に関わると、調査の幅を広げることにつながります。ただし、調査という本来の目的を投げ捨てて、お手伝いだけに没頭する必要はありません。できそうにないこと

については、遠慮なく「NO」と言えばいいのです。

調査での滞在中は、実は、現地の人たちに手伝ってもらうことばかりです。このような、「もしかしたらけっこうおじゃま虫かもしれない自分の姿」に気付いた時、少々は現地でお手伝いして恩返しすることも必要なのだろうと思います。このことは、忘れないでおきたい点です。

■現地から手紙を書こう

フィールドワークをうまく進めるコツとして、文化人類学の先輩から教わったことは、「フィールドから、必ず手紙を出すように！」ということでした。訪問先で、自分の地元（日本の家族や友人、同僚たち）に手紙を書くことを、強くお勧めします。ハガキでもいいですし、メールやブログでもいいと思います。

これは、単に安否確認のためだけではありません。フィールドにいる間に、その時、その場での発見や感動を書きことばにしてだれかに伝えることは、もっとも新鮮で良質な報告となります。帰国したら、その印象や感覚はぜったいに薄れてしまうからです。

「状況のただ中にいること」は、後になって取り返せない貴重な体験です。それを、仮にでも一度文字にしておくことは、後で報告にまとめる時にとても役に立つのです。

■調査の後も続く関係を

帰国した後は、できるだけ早いうちに、お世話になった方がたに写真などを送ることをお勧めしたいと思います。私の知っているカメラマンは、現地でデジカメの写真を撮ったら、その日のうちに CD に焼いて相手にプレゼントしていました。こうしてすぐにお礼が届けば、撮られた側も大喜びです。不信感どころか、感謝とともにいっそう仲良しの関係が作れることでしょう。時には、「もっと撮ってくれ！」と、調査の幅が広がることにもつながります。

また、調査の結果として完成した論文などを、協力してくださった方に送りましょう。もちろん、論文の「謝辞」では、協力くださった方がたの名前を明記します。

さらに、できることならば、末永くいっしょに調査できる現地のパートナーを育てていきたい、私自身はこのことを目標としています。

一橋大学の関満博氏は、「刈り取るだけではだめ、フィールドを育てよう」ということを提唱しています（関, 2002）。フィールドで調査してもデータを持ち去るだけ、後には何も残らず、草一本生えず、調査者も忘れ去られてしまう…。そんなむなしい研究を積み重ねるのはやめて、ともに調査ができる関係を気長に作っていこうという提言です。

アフリカで手話の調査に関わる私は、究極的には、現地のろう者が自分たちで手話の調査を進めるようになることを目指しています。そのために、専門知識や調査法を現地のろう者たちに提供し、いっしょに調査できるような態勢作りに取り組んでいます（写真 5）。

このほか、最近、私が日本で関わったこととして、日本手話学会での取り組みがあります。学会誌『手話学研究』第 18 巻（日本手話学会, 2009）で、「手話研究の倫理」という特集を企画しました。ろう者と聴者が快適に共存できる学会を作るために、方法を一緒に考えていこうという試みです。聴者の専門家がろう者のことを一方的に調査し、データを取って持ち去ってしまう、後に何も残らない、というような関係ではなく、対等なパートナ

ーとしてともに調査の場（フィールド）を育んでいきたいという思いの現れです。

遠い調査地の話だけでなく、身近な研究の場面でも、「刈り取るだけではだめ、フィールドを育てよう」ということばは生きてくるでしょう。このすてきなことばを、この講演のまとめとして、今回の学会大会ご参加のみなさまに贈りたいと思います。

日本聾史学会の執行部、会員のみなさま、福岡大会実行委員会のみなさま、ご参加各位にあつくお礼を申し上げて、私のお話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

■会場からの質問

【質問】伝統的な社会で、たとえば女人禁制の行事などが行われていた時、フィールドワーカーとしてはどのように対応しますか。

【亀井】確かに、近代的な人権思想にそぐわない事例に出会うことはあるでしょう。ただし、そこだけを取り出して相手を批判したり説教したりするのではなく、「どうしてそのような規則になっているのか」「背景にはどんな思想があるのか」などと、まずは文化を全体的に理解するよう心がけたいものです。理解した上で、やはり時代に合わないことがあれば、提案をして、ともに変えていくことがあってもいいでしょう。ただし、批判する前に、まずは相手の立場を理解することが大切だと思います。

■引用文献

サイード, エドワード. 1978＝1993. 今沢紀子訳『オリエンタリズム（上・下)』(平凡社ライブラリー) 東京: 平凡社.

関満博. 2002.『現場主義の知的生産法』(ちくま新書) 東京: 筑摩書房.

武田丈・亀井伸孝編. 2008.『アクション別フィールドワーク入門』京都: 世界思想社.

日本手話学会. 2009.『手話学研究』第 18 巻 (特集・手話研究の倫理).

マリノフスキー, ブロニスロー・カスパー. 1922＝1967. 寺田和夫・増田義郎訳「西太平洋の遠洋航海者」『世界の名著 59』東京：中央公論社. 55-342.

峯陽一. 1996.『南アフリカ: 「虹の国」への歩み』(岩波新書) 東京: 岩波書店.

山路勝彦. 2006.『近代日本の海外学術調査』東京: 山川出版社.

■関連ブックガイド（※本講演の内容に深く関わる書籍を例示しました）

亀井伸孝. 2009.『手話の世界を訪ねよう』(岩波ジュニア新書) 東京: 岩波書店.

宮内泰介. 2004.『自分で調べる技術: 市民のための調査入門』(岩波アクティブ新書) 東京: 岩波書店.

宮本常一・安渓遊地. 2008.『調査されるという迷惑: フィールドに出る前に読んでおく本』神戸: みずのわ出版.

好井裕明. 2006.『「あたりまえ」を疑う社会学: 質的調査のセンス』(光文社新書) 東京: 光文社.

写真キャプションおよび表

写真１　ブロニスロウ・マリノフスキー（1884-1942）
（写真: Wikimedia Commons）

写真２　古い写真をノートパソコンで提示し、ろう者にインタビューする
（2010 年、コートジボワール・アビジャン市）

写真３　教会でろう者や手話通訳者対象の講演をする
（2008 年、コートジボワール・アビジャン市）

写真４　大学の言語学研究所で、ろう者とともに手話に関する研究発表をする
（2010 年、コートジボワール・アビジャン市）

写真５　現地のろう者対象に、手話調査法の学習会をする
（2010 年、コートジボワール・アビジャン市）

表１　フィールドワークの長所

【長所 1】自分の手で一次資料を入手できる
【長所 2】長時間をかけて緻密な理解ができる
【長所 3】当事者の視点を模擬体験できる

表２　フィールドワークの短所

【短所 1】時間がかかりすぎる
【短所 2】調査者の主観や印象がまざりこむ
【短所 3】調査法を共有しにくい

表３　フィールドワークをめぐる同時代の課題

【課題 1】長期滞在の中で「調査被害」の問題が起きることがある
【課題 2】現地を去った後、勝手なイメージで論文を書いてしまう
【課題 3】当事者が自分で発信すればよくて、代弁者は要らないという考え方もある
【課題 4】植民地支配やアパルトヘイト（人種隔離政策）を補強した過去がある
【課題 5】固有の文化を擁護すると、「人権」などの普遍的概念を普及させる場面で、抵抗勢力となってしまうことがある

写真 ①

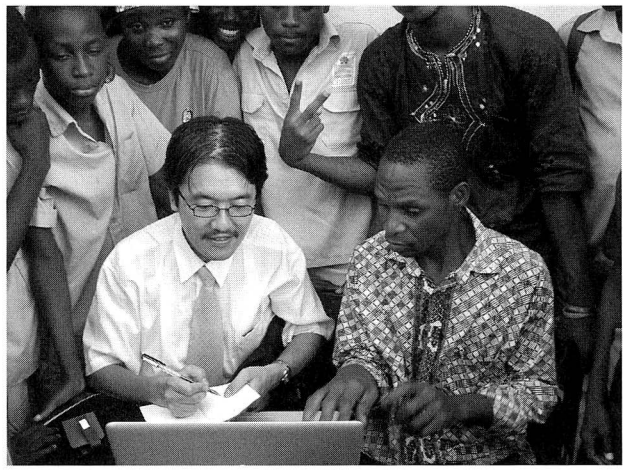


写真 ②

写真 ③

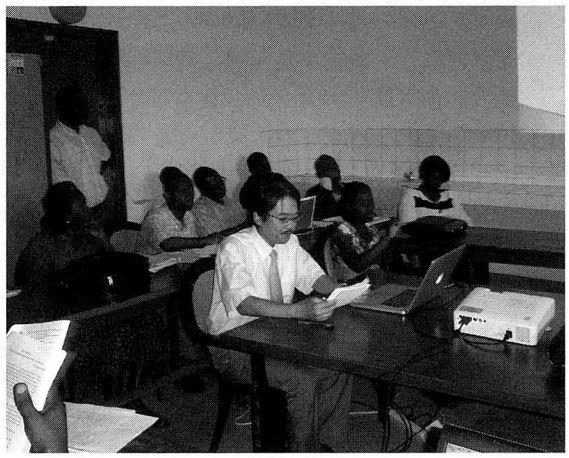


写真 ④

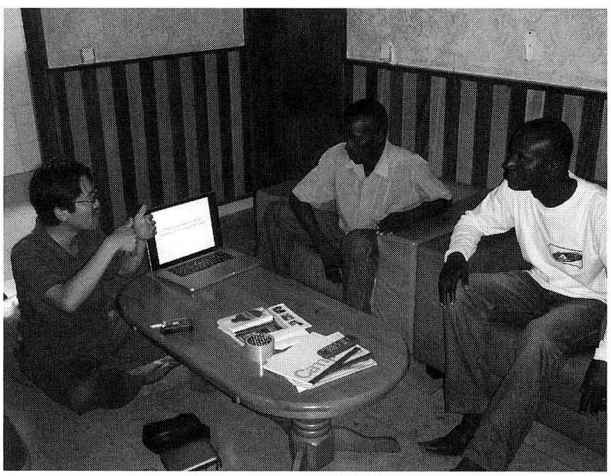
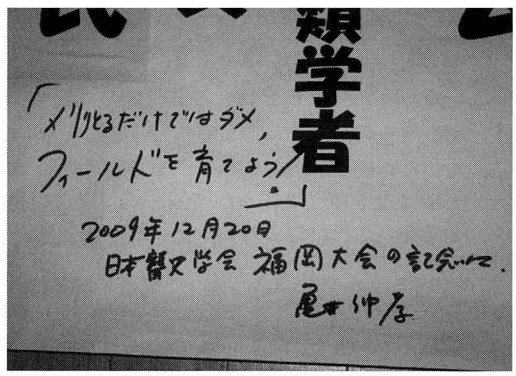


写真 ⑤



亀井伸孝氏のサインメッセージ